

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第28号

平成28年7月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

鎌倉幕府討滅、最大の功労者 新田義貞

実直な東国武士として南朝総大将の重荷背負う生涯

6月の例会は、新田義貞について学びました。

南北朝の時代、後醍醐天皇を戴いて立ち上がった新田義貞、足利尊氏でしたが、建武の新政が始まると、その対立は激化し、南朝と北朝にわかれて熾烈な戦いをする事になります。

もともと源義家の子、義国の二人の息子であった義重と義康の末裔、新田義貞は新田郡を継いだ義重の嫡流で新田氏、足利尊氏は足利荘を継いだ義康の嫡流で足利氏、それぞれその惣領でした。

しかし、鎌倉時代末期の新田氏と足利氏を見ると、新田氏は新田荘とその周辺（八幡荘）を所領とする一豪族に過ぎず、足利氏は上総国と三河国の守護職を務め、幕府の要職に在り、加えて北条得宗家との姻戚関係もあり、両氏の間にはその勢力・地位ともに雲泥の差があったのです。

義国の家訓の下、地方政治に生きる

新田義貞のこのような状況を理解するうえで、火山灰地の上に立つ新田荘成立の背景を見ておかなければなりません。

新田氏の祖となる新田義国は、久安6年（1150）、京都路で、従三位右近衛大将藤原実能とトラブルを起こし、身分差故の恥辱を受けました。そして、義国の従者が、実能邸焼き払い事件を起こし、勅勘（天皇からの咎め）によって失脚し、下野国足利の別業地（別屋敷）に下ることになるのですが、義国は、この失脚を教訓に、「武士の栄達は望まず、地方経営にいそむことが安楽の道」を家訓とします。

そして、新田荘の経営を義重（新田家）に、足利荘を義康（足利家）に継がせるのです。新田荘を継いだ義重は、義国の教えを家訓として代々引き継ぐこととなります。

なぜ兄の義重に“空閑の郷々”と云われた未開発の新田荘を継がせ、二男の義康にすでに立荘されていた足利

荘を継がせたのか、疑問が残るところですが、義国自らが足利の別業地に引きこもったため、長男の義重が父、義国に従ったのではないかと考えられます。

そして、この新田荘を継いだ義重は、義国が久安6年の失脚を教訓に残した家訓、「武士の栄達は望まず、地方経営にいそむことが安楽の道」を、代々引き継いだため一豪族に止まったものと考えられます。

なお、この新田荘は、当時、浅間大噴火（1109年）により、火山灰・軽石・岩による荒廃した大原野で、新田郡の西南部に広がる“空閑こかんの郷々”（開発可能な土地の意、且つ、開発によって耕地化された土地を意味する）は、東西4里、南北5里に広がる扇状地を形成していました。

新田庶子との関係でも劣勢下に

このように足利氏に後れを取っていた新田氏ですが、新田宗家の新田義貞は、新田庶子との関係でも劣勢下に在り、新田氏惣領家としての立場はすこぶる弱いものでした。

新田義重には、惣領家の義兼以外に、義俊（里見家）、義範（山名家）、義季（世良田家）、経義（瀬戸家）がおり、義兼の娘婿に足利氏三代目の義純を迎え、岩松家を名乗っていました。

この岩松家は幕府の地位は新田宗家よりも上で、義純の四代後の経家は、義貞の鎌倉攻めには参画し大功を挙げますが、その後、足利尊氏に味方して、飛騨国守護職に就き、従五位下兵部大輔となっています。

また世良田家は、臨濟宗・長楽寺の門前町で、世良田宿の交通の要衝をしめ、当時、北関東一の商業都市の長楽寺の別当として経済的優位を持って世良田の地を仕切っていました。

これら両家は、当時、新田宗家をはるかにしのぐ勢力、財力、地位にありました。義貞は、幕府の楠木正成討伐命令を受け、その戦費調達にはこれら庶氏に頭を下げ、

協力を求めなければならない事情にあったのです。

稲村ヶ崎の戦いで劇的な勝利

そして、楠木正成がこもる金剛山の搦め手攻撃に参陣していた義貞は、倒幕の論旨を密かに取得し、仮病を使って新田荘に帰っていました。

そこに、楠木正成討伐軍費調達のため、有徳銭の徴税使が世良田に入部、義貞は無法な誹責に怒り、この二人を斬首・拘留したのです。

義貞は、ある意味ではこの行為によって退路を断って、倒幕挙兵に踏み切り、黄金づくりの太刀を海に投じた有名な、干潮を利用した稲村ヶ崎の戦いで劇的な勝利を挙げ、遂に鎌倉幕府は落ちたのです。

しかし、この時、義貞に国の政全体の流れは読めておらず、父祖の怨念を晴らし、上野の国司を目指す程度のもではなかったか、と思われま

す。鎌倉幕府討滅の最大の功労者になった義貞でしたが、京の都を抑えた尊氏に対する武士の評価は高かったのです。加えて、二人の地位に歴然とした差がありました。

鎌倉陥落直後に、盟友であった尊氏と勢力を競う形となり、鎌倉での屈辱的な撤退で、義貞は尊氏との対立を深めていくことになります。

結果、南朝の総大将として、鎌倉、京都、播磨、越前と転戦を重ねることになります。後醍醐天皇の野望に振り回された悲劇の生涯ともいえますが、そのクライマックスは、義貞はずしの後醍醐帝と尊氏の和睦と云えるでしょう。しかし、尊氏の甘言にのった後醍醐帝は花山院幽閉の憂き目にあうことになります。

いずれにしても、楠木氏のように天下・国家論を持たない実直な東国武士であった義貞の悲劇と云えるのではないのでしょうか。

従四位に処せられるも、武者所に止まる

悲劇のスタートは、建武の新政の際の帝の恩賞に如実に表れています。

足利尊氏は、帝の諱をいただき尊氏と名乗り、従三位鎮守府将軍、常陸・下総・上総・三河の4か国の国司・守護となり、弟の直義も、従五位左馬守となって相模・遠江の2か国の国司・守護職が与えられました。

一方、義貞は従四位で、上野・播磨の2か国の国司・守護、息子の義昭は越後の国司、弟の義助は駿河の国司になっています。また、正成は従五位で、河内・和泉の2か国の国司・守護に、長年は因幡・伯耆の2か国の国司・守護になりましたが、円心には恩賞はありませんでした。

阿野蓮子・尊氏派に篤く、大塔宮（護良親王）派を冷遇した、分断策とも思えますが、直義当たりの巧妙な根

回しがあったのでしょうか。

また、大塔宮派でも、新田一族は「武者所」にとどまっていますが、正成らは「恩賞方・記録所」として厚遇を受けています。

そもそも挙兵当時から、中央・幕府開府を目指すという明確な目的を持っていた尊氏と、家訓を守りながら、鎌倉攻めの功が故に、南朝総大将に位置付けられてしまった義貞、この二人の生き方に大きな違いがあったことは明らかです。

北畠親房は、神皇正統記に、「北国ニアリシ義貞モタビタビ召サレシカド、ノボリアヘズ。サセルコトナクシテムナシクサヘナリヌトキコエシカバ、云バカリナシ。」と記していますが、親房にとっての義貞軍は、使い捨ての軍団でしかなかった、と断ずる人さえいます。

人物叢書「新田義貞」峰岸純夫著の結び「新田義貞の史的評価」の一部を紹介します。（写真は同書より転載）

実直な東国武士が、鎌倉幕府討滅の大功績で一躍中央政界に躍り出て、その栄光の重荷を背負い続け、南朝方の総大将に位置付けられての生涯であった。（『尾島町誌』）

義貞は勇将であっても智将ではなく、政治家ではない。（長谷川端）

太平記において、正成は「智謀」と「武略」がことさら虚構・創作されて称揚されるのに比して、義貞は、優柔不断で戦機を逸する武将として描かれる。（中西達治）

歩射隊をとまなう集団戦法に不慣れな、あくまでも騎馬隊を主力と考えていたところの、惣領制的武士団を率いる軍団長の最期であった。（佐藤和彦）

建武5年（延元3年1338）7月、黒丸城攻撃赴援のため50騎を率い懸けつける途上、藤島の燈明寺岬において、黒丸城を出撃した300騎と遭遇、歩射隊に深田に追い落とされ、乱射された矢に倒れ、自害した、という偶発的な事件であっけない最期を遂げた義貞。しかし、そこから遡って時代遅れの凡将・愚将との発想をする方法論は如何なるものであろうか。（峰岸純夫）

新田殿と称された家康の開府で、一矢

新田義貞が目指した最後の望みは、比叡山における後醍醐帝と義貞の妥協の産物として、恒良親王を擁しての北国管領府の構築ではなかったのでしょうか。

北国管領府の夢は、義貞が北国に下った後、勢力を盛り返しつつあった中で、藤島城攻防戦の不慮の事故によってあっけなく潰えました。

が、やがて260年の時が経過して、新田殿と称された家康が幕府をつくり、新田氏復活の物語へと歴史は続きました。江戸幕府の開府は、後世、新田氏が足利氏に決着をつけた一幕ともいえなくはないでしょう。

（文責「四條駿楠正行の会」代表 扇谷昭）



稲村ヶ崎（織田百合子氏撮影）